あまいろだより

旅が、「学校」。

天色便り
あまいろ探偵団、走る！
手づくり市民メディア
第 30 号　2017.3.15

まちの話題

▶昨年の２月に一緒に、高江と辺野古に行ったメンバーで、ゆる～くやっております。「ゆんたくしよう@しが」です。ご紹介の機会を頂きありがとうございます。このゆる～く、子どもも、大人もワイワイと気になってることを美味しい物を食べながら“話すこと”を大切にしていきたいと思ってます▶沖縄では、何かの行事の後にピクニックのように、ご飯を食べたりお茶したり、オリオンビール飲んだり、歌ったり踊ったり“ゆんたく”することをとても大切にされています。これが、長～く物事を続けていける秘訣かな？と、「ゆんたくしよう@しが」は考えます。ゆんたくしよう@しがメンバーで辺野古の抗議行動に参加した時、唄や踊り、オジイオバアからいただく甘いお菓子やパンにとても励まされました。時に爆笑したり、オジイオバアが戦禍を逃れながらサトウキビで命を繋いだ話を聞いて涙したり。泣いたり笑ったりワチャワチャと。一度行くと、また行きたくなる場所です▶沖縄大好きだな～とか、基地のことなんか気になるな～という方は、良かったら、一緒にゆんたくしてみませんか？昨年の１２月には高江の映画の上映会&川口真由美さんのLIVE、京丹後の米軍レーダー基地&美味しい物堪能&温泉スタディーツアーをしました。今後の予定としては（ボチボチなので、あくまでも予定。。。）、証言を聞く会・講演会や自主上映会・たんにゆるくおしゃべりする会・ニュースレター・小さなスタディツアー・沖縄、アジア料理会など。ただただ、美味しい物を食べる。などなど、ぼちぼち、ゆる～く、長～くやっていく予定です～♪（むーたん）

http://www.aoibiwako.org/amairo-channel/

びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを使用しています（びわ湖の森の間伐材活用）

あまいろだより（天色便り）第30号
あまいろ探偵団、走る！手づくり市民メディア
特集／旅が、「学校」。
発行日／2017年3月15日
編集／あまいろ探偵団（綾牧生・岸田知之・北岡七夏・きむきがん・志萱未来・中野和子・藤井朋子・森優子）
表紙タイトル／岸田知之
発行／特定非営利活動法人碧いびわ湖
～大切なことを他人まかせにしない。自分たちで力をあわせてつくる～
〒521-1311滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3番地
TEL0748-46-4551　FAX0748-46-4550
Eメール　info@aoibiwako.org
ブログ　http://aoibiwako.shiga-saku.net/

暮らしのコラム

くらしとせいじカフェ

玉崎洋子

こんにちは～。たーさんです。ちょっとずつ春が来ましたね～うれしいな～！梅の花が咲いてる～。

そして、もうすぐ大震災から6回目の3月11日がきます。先日、毎時630シーベルトという今までで一番高い放射線が福一原発の格納容器からでました。そう、私たちはまだ緊急事態宣言の中で生きています。これからも。

いつこの日本が住めないところになってもおかしくないよなーって思います。

それでも自分にできることやり続けて、自分たちが望む未来を創っていったら、何かが変わるんじゃないかな～変えたいなぁ…。　そんな時に思い出すのがムヒカ大統領の言葉！

「人類の重要な文化の誕生や発展は、片隅の小さなコミュニティーで生まれているんだよ。ギリシャでもルネサンスでもアジアの文明でもね。それはつまりきみたちのコミュニティーでも生まれるということだ。大きな変革は小さな村から生まれるんだ。だからこそ、一人ひとりが挑戦することが必要なんだ。挑戦しない事には、なにも成し遂げられない」。

ということで、「くらしとせいじカフェ」絶賛巡回中～で～す！

「くらしとせいじカフェ」って何なん?というとですね～、お茶を飲みながら雑談するだけなんですけど、カッコいい名前つけて、さも素晴らしいことやってるかのように呼びかけたりしてます。そして、日々感じてることとか、疑問に思ってることとか、こうなったらいいなーとか、好きにしゃべります。議員さんも参加されたりするので、「これはどうなってるんでしょうか」とか聞けたりして、結構勉強になります。そして、「こうしてほしい」とかも聞いてもらえるので、希望が叶ったりすることもあります!！仲のいい友達が普段しゃべらへんようなこと話したりして、「こんなこと考えてたんやー」と新鮮やったりします。情報の共有や意識づけもできます。自分も話すことによって頭の整理ができます。ふかーーい話になったりもします。政治のことが分からなくても聞いてたら「そういうことかー」とか発見できたりします。もやもやがすっきりしたり、もっともやもやしたりします。

まあ、なんやかんや言うて、「お茶しながらしゃべるのがほんまに楽しい！」につきます。来たらわかるよ～。来てな～。いろんな場所でいろんな人と話したり聞いたりすることの大切さが、そのつながりが、 明日につながるんだなと、片隅の小さなコミュニティーから新しい文化や大きな変革がきっと生まれるのだから、あなたも「今日は『くらしとせいじカフェ』やりまーす」っていうのはどうかな～。

****
玉崎洋子（たーさん）／４児の母。「くらしとせいじ」を楽しくほがらかにつなげる、信楽のお母ちゃん。たーさんの作る自家製天然酵母のパン「たまぱん」は、オーガニック&つながるマーケットin三井寺で買えます！
＊くらしとせいじカフェ＊
https://www.facebook.com/kurashitoseijicafe/

こんな本、いかがですか？

『おとながこどもにできること　ーシュタイナーのこどもの育てかた』ローター・シュタインマン著／春秋社

日々のことに追われ、ふと気づくと子育てをたのしむ心のゆとりを失っている…。

そんな子育て中のおとうさん、おかあさんにおすすめしたい本です。わたし自身が子育てまっさいちゅうの母親なので、よくそんな状態に陥りがちです。そんなとき、わたしはこの本をひっぱり出してきて、読みます。きちんと机に向かって、ではなく、パラパラとページをめくったり、パッとひらいたところを読んだり。読んでいると、ことばがまるで水のようにからだにしみこんでいく感じがします。そして、何度読んでも、毎回あたらしい気づきとささやかな勇気をもらって本を閉じるのです。

この本を書いたローターさんは、シュタイナー学校の先生です。彼は、子育てや教育は、「世界でいちばんふかい呼吸」だ、と言っています。おとなが子どもに対してはたらきかけたことは、ながいながい時間をかけて、子どもに響いていきます。ものごとの内側や見えない部分のことは、「成果」としてすぐには表れてこないし、そもそも「成果」なんてことばで表せるものではないのかもしれないなあ、と思うのです。

また、彼は、まちがいに気づくこと抜きに、学ぶことはない、と言っています。それはよく言われていることです。でも、やっぱりまちがうことに対しての不安がまだまだあります。だからこそ、この本にある「まちがえながら子育ての時間を生きることは『まちがっていないんだ』ということを、お伝えできるかもしれないぞ」というローターさんのことばに、わたしはとても勇気づけられます。さあ、また始めよう、と思えてくるのです。

****
岸田めいこ／３児の母。元小学校教員。長男の不登校をきっかけにホーム・スクーリングを始め、栗東市の自宅で週１回・フリースクール『まなぶくらす』を主宰。（詳しくはhttp://ameblo.jp/manabu-class/）

くらしのね
いろいろ音色とその根っこ
自分たちの手でつくる
くらしの風景
碧いびわ湖から、新しく小さなよみものができました。『くらしのね』は、ひとりひとりのお母さんの、地域の中での様々な試みや、くらしや子育てをめぐる語りをたどります。
「子どもと湖が笑ってる未来」に向けたくらしのヒントを、いっしょに見つけ考えるよみものになることを願って、作っています。
創刊準備号、ぜひ手にとってご覧ください。

旅が、「学校」。

岐阜県恵那市にある『山のハム工房・ゴーバル』(http://gobar.jp/)で働く桝本大地さん。初めて彼に会った時、人の懐にすっと入ってくるような、人間をまるごと信じている人、という好印象を受けたのでした。お母さんにそのことを伝えると、笑いながら「この子、一度も学校に行ってないのよ〜」と。

今回は、「学校」に行かない選択をした二人の若者とともに、大地さんのお話をうかがいます。(和子)

中野平　17歳
通信制高校に通う。サッカーと音楽とこどもが好き。

桝本大地
2児の父

喜多織人　17歳
普通高校に入学するが辞め、通信制高校に通う。コーヒーと旅と音楽が好き。

不登校という経験

桝本大地（以下大地）▼小学校に行ったのは最初の一週間だか一ヶ月だか。三、四年生の時は、図工の先生が僕の絵をすごくほめてくれて、だから図工と体育だけ行ってました。中学校も卒業写真撮りにだけ行きました。

中野和子（あまいろ探偵団・以下和子）▼学校に行かなかった理由は？

大地▼良く聞かれるんですけれど…分からないんです。いろんな理由があると言えばあるんでしょうけど。田舎なので同級生が八人で、その中で一人いじめられている子がいて、そこに加わりたくないっていう気持ちもあり…。でもその前にまず、朝起きれないとか、算数の時間になるとオナラが止まらなくなるとか…身体が添っていかなかった。最初は親も行かせようとして悩んだみたいです。先生が枕元まで来て「おはよう〜」って言われたこともあるし。でもぼく、頑固だったので、かたくなに寝たふりをして。

行かなくなり始めると、たまに行ってもあんまり話もあわないし、勉強もついていけないし、行きにくくなるんですよね。そうすると、**気持ちとしては行きたい気持ちもあるし、行くべきかなとか、行かないで成長したら大人になれるのかなとか、そういうことばっかり考えてて、自信もなくて、暗い小学生でしたね。でも親が、「行きたくなかったら行かなくてもいいよ」って言ってくれたので。**ぼく「行きなさい」って言われたらつぶれちゃうような、本当に繊細な子だったと思うんですよ。だから親としてはそうするしかなかったんだと思うんですけど、**「勉強なんて、やりたい時にやらないと身にならないから」って。**

中野平（以下平）▼学校に行かない間は何していたんですか？

大地▼弟もぼくを見て学校に行ってなかったから、基本的には弟をいじめてました。

一同▼笑

大地▼五才違うので、何をしても勝っちゃうから、いじめになっちゃうんですね。自分も不安定だし、「おまえ学校行かないと、ほんとにひどい目に遭うぞ」って言ってみたり。自分も行ってないくせに。昼まで寝て、起きて、ごはんを食べて、ゲームボーイして、目が疲れたらやばいと思って遠くの山を見て。道路に寝転んで、雲が右端から左端に行く間に、カバになって魔女になったあと思いながら眺めてたり。ま、ヒマでしたね。

和子▼お母さんたちは勉強させようとはしなかった？

大地▼一応、公文式みたいなのをやってたこともあるんですけど、もう拒否反応みたいになっちゃってやらなかった。でも、「このままじゃぼくやばいかも」っていう不安の波がくるんですよ。そういう時は、勉強してる姿を人に見せるのはいやなので、みんなが寝てから布団かぶって、ノートに「あいうえお」ってひたすら書いたりして。でも世の中に字があふれてるから、普通に暮らしてたら読めるようになるし、必要になれば自分の生活に必要な計算もするようになる。今も必要になった時にいつでも勉強するつもりでいます。

旅が「学校」

和子▼いろんなところに旅に行ったんだよね。それはいつごろから？

大地▼**十二才の時にお父さんとネパールに旅行にいったんです。三週間トレッキングをしながら回って、その辺りから何となくスイッチが入ったというか…。**日本では自分みたいな人に会ったことがなくて、ずっと自分の名前も言えなかったし、人と会うのが怖かったこんなんで生きて行けるんだろうかって不安に思ってたんですけど、**ネパール行ったら、そこら中にゴロゴロ人が転がってるし、生きるパワーを感じて。何でもありかなって漠然と思ったんですね。**

そのあと十五才の時に、ヒッチハイクで北海道を一周したんです。船のチケットを予約するのにも、緊張で手が震えながら電話して。で、最初無謀だから、歩いて一周しようと思ってたんですけど、午前中いっぱい歩いて後ろを振り返ったら、スタート地点が見えて。本当にがっかりして、食堂の前で座ってたら、おばさんが「どうしたの？」って話しかけてきてくれた。事情話すと、段ボールとペンを持ってきてくれて、「これに行き先を書きなさい。そしたら誰か乗っけてくれるから」って。で、『稚内』って書いて、それ持って道端に立ってたんですよ。そしたらバスの運転手さんがただで乗っけてくれて。乗ったらさすがに、自分の名前とか、これからどこに行ってとか言うじゃないですか。何回かそうしているうちに、自己紹介のフォーマットができるんですよ。そうすると、自己紹介はできるようになったという自信になる。その後も、ヒッチハイクで乗せてくれた人が、「ウニ取りに行こう」って連れて行ってくれたり、家に泊めてくれたり。いろんな人に出会って、**一ヶ月かかって一周して帰ってきたら、ちょっと人としゃべれるようになった。学校は行けないけど、何とかなるかもって思ったんですね。で、そこからいろんなところに行きました。**十七才の時に、友達に誘われて、西表島でカヤックのガイドの仕事をしたんです。そこのオーナーさんがものすごく厳しくて、毎日二十回は怒るような人だったんですけど、でもすごく良くしてくれたんですよね。そこに一年半居れた、家を離れて働いて、自分でお金を稼いだっていう自信もついて、これならなんとか生きていけるかもしれないって。最悪、沖縄でカヌーのガイドならできるっていうひとつの選択肢ができて。知り合いのイタリアの彫刻家が助手を探してると聞いて行ったり、カナダにワーキングホリデーで行ったり。**僕にとっては旅が学校、勉強だったんですよね。**

平▼かっこいいですね。

大地▼でも、本当にそういうつもりだった。だから全部勉強だと思ってやってみようって入ってきた話を断らなかったんですよね。そのためのアンテナはいつも張ってて。

アラスカにいった時に、沖縄でカヤックガイドをやっていたおかげで、カヤックを十日間くらい漕いでしかいけないようなところにも行けて。そこでネイティブ・カナディアンの人たちと出会ったんです。星野道夫さん（写真家）がよく出入りしていたところで、星野さんのトーテムポールを建てるプロジェクトに参加させてもらえたり。森の奥に、ネイティブ・カナディアンの人たちの保護区があるんです。たくさんのトーテムポールが博物館にもってかれちゃったんだけど、トーテムポールって本当は建てたあと、自然に朽ちていくままにして、土になって森に還って、そこから木が生えるっていうサイクルにいるべきものなんだそうです。それができる保護区まで行って、立ち会わせてもらって。ほんと、神様がいるなっていう感じなんですよね。ストーリーを描いてたみたいに出会いが連なっていく。カヤックで一人で行った十日間、誰にも会わない。浜辺で火を焚いて、「ああ、本当に寂しい」って思った時に、遠くでクジラが跳ねるともう嬉しくて泣いちゃう…。そういう経験って旅のおかげだから。

「学校に行かない」と決めたのは？

和子▼織人くんはなんで学校を辞めたの？平は？

喜多織人（以下織人）▼正直なところ、全然勉強についていけなかったんです。高一のときに松本英揮さん（チャリで世界を旅するエコロジスト）のエコツアーに行って、すごい人たちにいっぱい会って、なんか俺こんなんじゃだめだって。でも、煮詰まってなんもしなくて、ずっとぐるぐる考え込んで本当に辞めていいんだろうかって。お父さんは「辞めたらいいんちゃう」ってかんじ。お母さんはすごい心配して。でも結局、辞めて良かった。大学受験を控えてる友達の話を聞くと、自分の本当にやりたいことで大学を選んでる人は一人か二人。みんな、こういったら就職しやすいとか。それで人生、生きていけんの？ってえらそうに言ってる自分がいる。でも、いくつかバイトもしてみて、本当にそうだと思って。自分が好きになれない仕事だとぜんぜんやる気にならないし。

平▼俺は、中学までずっとサッカーをやってたんで、サッカーはやりたかったんですよ。「普通」の高校だとサッカー部があって、ちゃんとサッカーやってる。でも、一年生はボールに全くさわれない。走ってばっかり。それでサッカーをきらいになるのもいやだったから、「普通」じゃない学校に行こうと思って、まあ探しましたね、沖縄から北海道まで。お兄ちゃんが行ってる東京の自由の森学園のフェスがあって、ついていったんですけどすげー楽しくって。ハナレグミが来るんすよ。だから行きたくて、受験したら受かったんだけど、結局お母さんが放射能汚染が怖いっていうから、負けちゃったんですよ。だったら、学校行かないで通信制でって。「普通」の学校に行ったらサッカーしか楽しみが無くなる訳じゃないですか、俺的には。でも通信制で良かったです。学校行かなくても三年で高校認定が取れる。

大地▼その間にゴーバルにも来れるしね。

平▼ドイツも行ったし韓国にも行ったし。通信制に行ってバイトして、社会とか大人とかがちょっと近づくじゃないですか。そうすると「アレ学んどけばよかった」とかなるんですよ。そういうのがわからず「勉強」なんてできないから、自分はこれで良かったと思う。

北岡七夏（あまいろ探偵団・以下七夏）▼**「学校」は行くべきもので、行けないとかわいそうとか、おかしいとか、みんながそういうふうに思ってるから、行かない子はつらいし、親は悩む。だけど、本来、悩むべき課題は「自分の居場所を探す」ということじゃないかと。「学校」じゃなくても、自分自身が尊重される居場所が得られるといいよね。**

織人▼悩むこともいろいろある。**でも結局は、他人にどうこう言われるのが怖いんじゃなくて、自分がかっこいいって思うものをやって、自分はこれでいいんだって気持ちにマインドコントロールしていけばいいんじゃないですかね。**かっこいい人見るとうらやましくて、自分が悔しくなって、どんどん自分が嫌いになるんですけど、そうなるのが嫌で。「じゃあ、やりたいことやったろうじゃねえか」ってなって、ギターも始めたし、旅もしたし、いろんな人と会ってるし。でもまだ、自分なんてまだまだだと。かっこいい人いっぱいいるし。平もそのうちのひとりだし。

平▼お〜。

織人▼だって、平とかが学校やめていろんなおもしろいことしてるときに、オレは高校でなんか意味もない勉強ばっかしてたから、すんごいうらやましくて。「悔しいわ〜、なんだよお前ら」みたいな。別の友達が十五才のときに宮崎までチャリで旅して。「じゃあ、オレは沖縄まで行ったる！」って思って行ってきました。そんな気持ちが五割くらい。残りの五割は好奇心と、自転車好きだなって。

親になって思うこと

大地▼学校は行きたいと思うならば行った方がいいと、ぼくは思います。あんなに学べる場があるんだから。でも学ぶ気がないのに行ったら、もったいないかなって。ぼく、今はすごい大学とか行きたいですよ。ソーセージを作り始めて、食に関することとか学びたいから。

今、いろんな問題が、学校のせいとか、家庭のせいとか、って言われちゃいますけど、結局学校だけじゃなくて、その地域だったり国だったり、全部に責任があるはず。「学校が問題」っていう風にくくっちゃうことに、すごく違和感を感じます。全部がつながっているというか…ぼくにとっての学校は、ちっちゃい建物の中じゃなかったから、そういう感覚で。**自分が親になった今、そういう感覚をもって、地域の人や学校に関わっていきたいと思います。**

森優子（あまいろ探偵団体験入団中）▼私、高校の時はさぼってばっかり。出席日数がギリギリやったんです。それでも一応学校には行って、同じように受験勉強して大学行ったんですけど。**私には、高校やめるとか、他の学校に移るっていう選択肢が頭の中になかったなあと思って。**どうにかさぼってどうにか過ごして。部活だけ行ったりとか。

大地▼**ある意味苦しいですよね、その選択肢があるっていうことが。自分の親がすごいなって思うのは、僕自身がすごく悩んでた、その僕をよしとしてくれたこと。**「行かなきゃいけない」って自分は思ってるから、そこで親にも「行かなきゃいけない」って言われたら、もう自分を殺してでも行ったと思うんです。でも、そうするとたぶん自分がどっかで潰れてただろうなって。そこで、「そこまでして自分を消さなくってもいいよ、そのまんまでいい」っていうスタンスでいてくれたので。信じてくれたっていうのかな、最終的に。いまから思えば小学生のこどもに対して過酷ですよね。「自分で決めなさい」だからね。でもそれってなかなかできることじゃないって思います。

岸田知之（あまいろ探偵団・以下知之）▼前に織人くんに「学校辞めて良かったことは？」って聞いたら、「自分の意見が言えるようになった」って言ってて。そこに自分で気付いてるって、すごいなと思った。**「学校に行かない」という選択が、自分で選択していいんだっていう更なる自信になっている。**「人を信じる」っていうのは、ある意味「許すこと」に近い感覚なのかな。

七夏▼**誰かが「あなたの不安はこれです、だからこうしましょ」って引いてくれる線路に乗っていると、悩む時間までも取られていく。**大地さんのご両親は、大地さんが悩んでることもわかりながら、「悩むことも大事」と思ってはったという感じがすごくして、すごいなあと思いながら聞いてました。こうしなさい、ああしなさい、って言うたほうが、親としては絶対楽なんやけどね。

大地▼ほんとそうですね。ぼくが答えを出すのを待ってくれたんですよね。

知之▼**ご両親自身が、自分をしっかり生きてたということもあると思うよね。**

大地▼ぼく自身は不登校という経験をしたけど、親になってこどもが小学生なる、例えば不登校になるとすると、親としては初めての経験なんですよね。例えば、ぼくがこどもの時に、親が「学校行け」って言ってくれていたら、今の自分はないけれど、そうじゃない自分は育ってきてる。それがダメだったかというと、そうじゃない。もしかして今より全然いいことになってるかもしれない。その時の親の対応が正解だったかどうかは、わからないですよね。**ただ、その経過があって、とりあえずぼくは生きて今ここにいるっていうことしかない。だから、親が自分にこうしてくれて正解だったから、自分のこどもにもそうしようというふうにはできない、と思ってます。そうしたら、ぼくと同じ人間を作るフォーマットに、こどもをハメることになってしまうと思うので。その子その子で、お互い初体験の中で、ぶつかり合いをしていかなきゃなのかなっていう気持ちでいます。**

和子▼平と織人くんに、何か激励の言葉、もしくは忠告をお願いします。

大地▼アドバイスするような立場でもないし。二人ともすごいと思います。本当に尊敬します。

織人▼平がそれだけかって目をしてる（笑）。

大地▼ぼくは流れに乗れなくてこうするしかなかったけど、二人は自分でそれを選んでるじゃない。だから、二人はすごいなって思います。

平▼カッコつけてるだけですよー。